

主体性の追求と挫折—金史良の「光の中に」をめぐって

Desire for the liberated self— “In the Light” by Shiliang Kin

朴 銀姫
PIAO Yinji

要旨 本論は、植民地時代という極めて特殊な背景の中で書かれたテキスト—「光の中に」を取り上げ、「主体性」の追求や挫折、抵抗を読み解こうとするものである。結論から言えば、「主体性」とは「意志」と「行動」との反復的な分裂、結合の中に存在する矛盾状態・生成状態の様相に他ならないということになるであろう。まず、このテキストは、自分に与えられた名前の呼び方によって、また自分の使用言語によって、主体の主体性が変わっていく事態を明確に提示している。「名前」という出来事の外部と自己意志という内面の相互関係についての分析から、主体性の追求や挫折、抵抗の中で生きてきた植民地朝鮮人の時代像を把握することができた。また、言語や血統に関する集団的イデオロギーが時代の支配的価値として個々人を抑圧する状況の中、それに対する個人の実存的抵抗を描き出したという点で、このテキストは植民地朝鮮人作家による日本語文学の中で例外的な意義を持つ作品であると思われる。

はじめに

「主体性とは何か」という問いに答えることは難しい。この困難は問われている主体の謎めいた複雑性にのみ帰せられるものではないからである。本論は、主体の主体性を「自己同一性」と混同し、それを結局は「存在困難性（有難性）」という混迷と矛盾のうちに見失ってしまうハイデガーの「存在論」から脱することを目的とする。また、主体の主体性を「自己関係性」と混同し、それを結局は「感受性（可傷性）」という自己繫縛のうちに閉塞させてしまうレヴィナスの「倫理学」からも逃れようとする。つまり、ここで論じようとする主体の主体性の問題は、「自己同一性」の問題でもなければ、「自己関係性」の問題でもない。本論は、「思考する主体」、「行動する主体」という視点から「自己表現性」（様相・態度）の問題を分析しようとするものである。

「自分の意志・判断で行動しようとする態度」が「主体性」の辞典的な意味であるとするれば、ここで「意志」と「態度」は必ず因果関係を有しているはずである。即ち、「意志」とは「主体」の欲動の場であり、「態度」を生み出す内的原動力である。したがって、「態度」とはある主体の外的表現、つまり社会的な自己確立を表わす。「意志」と「行動」は、上下関係でも、優劣関係でもなく、相互内包的に存在するものである。理想的に言うならば、主体は「意志」と「行動」の一致によって明確な「主体性」を表わす。しかし両者の一致は現実的に可能であろうか。

ここでは、「光の中に」¹という植民地時代の朝鮮人作家が書いた小説を分析する。作者

¹ 『光の中に』：1939年10月、保高德蔵主宰の同人誌『文芸首都』に掲載。第10回芥川賞候補作品。

である金史良²は、この小説を1938年『文芸首都』に日本語で発表した。当時「光の中に」が注目された理由の一つは、朝鮮出身作家の日本語による創作であったからである。言い換えれば、朝鮮人作家の「国語」(日本語)創作を指導する日本文壇の「内鮮文学建設」への意志が、「光の中に」の理解に先入観として深く染み渡っていたのである。もう一つの理由は、芥川賞選考委員会の審査評に見ることができる。選考委員たちの共通認識を再構成してみると、第一に、「光の中に」は朝鮮人の民族問題を題材に取り上げている。第二に、その題材は「国家的重大事」と深く関わっている。したがってこの作品を高く評価する、ということになる³。

これら当時の関心から出発した従来の研究は、「光の中に」を作品として分析してきた。作品という概念は、作家に帰属するものであり、あくまでも作家に還元されるものである。つまり、それは何よりも作品と作家との関係の特権化し、作品のすべての鍵は作家にあると強調する。このような主張の結果、「光の中に」には「植民地時代の朝鮮人作家による小説」という評価が固着化してしまっている。

しかしここでは、「光の中に」をテキストとして解釈しようとする。つまり、小説を作品という枠から解放して言語の出来事、つまり意味の出来事として考えようとする。さらに言えば、テキスト分析の鍵は、テキストを読む無数の読み手が把握しているものである。

このテキストについて語るべきことはたくさんあるだろう。しかしここでは、ジェノ=テキストとしての小説ということに限って考えてみたいと思う。したがって、人間の「主体性」追求と挫折の過程は、結局テキスト生成に伴う欲動の場であることが証明できるだろう。

1. 「名前」という出来事

「光の中に」の語りが焦点を合わせている山田春雄は、いわば「混血」として生まれた。日本人の父と朝鮮人の母を持つこの少年は、混血から来る矛盾の中で引き裂かれた存在である。さらに言えば、「父なるもの」に対する無条件な献身と「母なるもの」に対する盲目的な拒絶の中で少年は苦しむ。ここで「父なるもの」が日本を、「母なるもの」が朝鮮を指しているのは言うまでもない。つまり、日本と朝鮮の間で少年は引き裂かれた存在であり、主体性を失った存在でもある。

ところが、或る晩のこと子供たちと騒いでいる所へ、私の生徒の一人が真蒼にひきつったような顔をしてはいって来た。それは自動車の助手をしながら夜になると英語や数学を習いに来る李という元気な若者であった。彼は戸を閉めると挑みかかるような調子で私の前に立ちはだかった。

「先生」それは朝鮮語だった。

私ははっと思った⁴。

² 金史良：1914—1950年、小説家。「在日朝鮮人文学」の先駆的存在である。1931年日本に渡り、1936年、東京帝国大学文学部に進学。植民地時代には日本語・朝鮮語両方で創作活動を行い、朝鮮解放後には平壤にもどり、朝鮮語での創作に専念する。1950年朝鮮戦争が始まると北の軍隊に従軍し、退却する途中落伍。その後の消息は現在にいたるまで不明である。

³ 鄭百秀『コロニアリズムの超克』(草風館、2007年)を参照せよ。

⁴ 金史良『光の中に』、講談社、1999年、14頁。

この呼びかけは、物語にとってどんな構成的機能を持っているのだろうか。この短いテキストは、この「先生」という朝鮮語の呼びかけによって始まる。

ここで「私」を朝鮮語で「先生」と呼んだのは、朝鮮人の青年李である。李の突然の出現よりも、彼の朝鮮語での呼びかけにこの小説のすべての鍵が隠されている。さらに言うならば、この出来事には最も基底的な問題が刻まれていることを見逃してはならない。

まず、注目すべきことは、「先生」という声が突然聞こえてきた瞬間、「私」は自分が朝鮮語で呼ばれていることを感じて「はっと思った」ということである。「先生」である「私」が「先生」と呼ばれることに「はっと」思うこと、そこにこの小説の提起する根源的な問題がある。この呼びかけが朝鮮語でなされたということが何より問題なのだ。李という朝鮮人の青年が、朝鮮人である「私」を、朝鮮語で「先生」と呼ぶ。この過程にどんな問題が潜在しているのだろうか。なぜこの呼びかけがすべての出来事の起源になるのだろうか。

小説中の語り手である「私」は、帝国大学に通っている南という朝鮮人の大学生である。物語の観察者である「私」は、S協会で英語を教え、協会の中では「ミナミ」という日本名で呼ばれている。つまり、日本人として認識されているということである。周りの人々が私を呼ぶ呼び方について、「私」は内心非常に気にしている。ここで対象化されているのは、「私」の意識である。自分の名字の呼ばれ方によって、他者の目に映る自己像が変わっていく。「ナン」と呼ばれる場合と「ミナミ」と呼ばれる場合、これは単純に言語的な読み方の差異ではない。「ナン」という朝鮮名字の呼び方の中には、被支配民族という屈辱が、「ミナミ」という日本風の呼び方の中には、支配民族・本土民族という意味が含まれている。

「はじめはそんな呼び方が非常に気にかかった」と「私」は意識している。ここで「そんな呼び方」とは、協会の先生たちが「ミナミ」と呼び始めることを指している。しかし「私」はそれに対して、自分は「ナン」という朝鮮人であることを明かすことはない。「ミナミ」への違和感は持ちながらも、自分が「ナン」であることを打ち明けようとしないのだ。意志と行動の矛盾、即ち意志と態度がずれていく過程とも言えるが、それはこの出来事が生じるまで、隠されたまま「私」の意識の中に潜在してきたのである。

「先生」という朝鮮語での呼びかけ、この物語の始まりの出来事としての呼びかけによって、意識の中に潜在してきたすべての矛盾が再現される。

まず、山田と「私」の関わりがこの呼びかけによって明らかとなる。山田は「私」に出会った瞬間から朝鮮人ではないかと疑いの念を抱きながら、「私」の周りに付きまとい続けた。「私」が「ミナミ」という日本名で呼ばれることに、少年は強い違和感を抱いていたかもしれない。朝鮮人の母親を持つ山田にとって、「私」は「母なるもの」に代わる無意識的な懐旧の対象であった。李による「先生」という朝鮮語での呼びかけによって、「私」の身分が確認できた山田は特異な愛情表現を示しながら一段と強く付きまってくる。

山田は「ミナミ」と呼ばれる「私」の顔に「ナン」という朝鮮人の顔を感じ、自分との同質感を抱いていたはずである。それは植民地時代を生きてきた多くの朝鮮人たちの自己意識であると言えるだろう。

私はやはりこういう無邪気な子供たちと遊ぶためには、却ってその方がいいかも知れないと考えた。それ故に私は偽善をはる訳でもなく又卑屈である所以でもないと自

分に何度も云い聞かせて来た。そして云うまでもなくこの子供部の中に朝鮮の子供でもいたならば、私は強いてでも自分を南（なん）と呼ぶように主張したであろうと自ら弁明もしていた⁵。

「ナン」という名字の持つ植民地朝鮮出身の「私」が、日本風に「ミナミ」と呼ばれる状況に直面して囚われる「偽善」と「卑屈」の心理状態は、いわば不可分離の相互内包的な錯綜体とも言うべきものであった。「無邪気な子供たちと遊ぶために」という前提は、植民地住民の共同体的イデオロギーからすれば、確かに「善」であろう。しかし、「私」にとって、それを行動に移すことはただの純粋な「善」ではなく、「偽善をはる」ことであった。つまり、「善」を「偽る」ことに過ぎない。そして、「ナン」と名告ることを主張しようとする動機には、民族意識という内面的欲動の当為性が作用している。さらに言えば、そこには被支配民族としての抵抗・反発意志が無意識的に働いていると思われる。

しかし、この民族意識から出発した「ナン」という呼称への欲求は、「ミナミ」と呼ばれる現実的状况の中で常に葛藤し、分裂させられる。「ナン」という呼称を主張しようとする欲求は、周りの呼び方に同化するという「卑屈さ」によって抑圧されてしまうからである。即ち、「偽善」の中には既に「卑屈」の契機が介入している。この「卑屈」をただ人間的な恥として捉えることはできるだろうか。このような「卑屈さ」は、支配・被支配という現実の中で、被支配者が自分たちに与えられている差別の条件（「ナン」という朝鮮人に対する社会的な差別）を払拭し、支配者側の価値（「ミナミ」という日本人に対する待遇）を欲望する際、誰もが経験せざるを得なかった自己拘束的な精神現象ではなかったであろうか。周りの呼び方に対して「卑屈さ」を覚えるということは、他者との関わりの中で成立する自己意識の働きの結果に他ならないからである。

人間が「意識する」というとき、意識の内面には「意識する主体」と「意識される客体」がともに存在している。つまり「表象化・概念化されたものごとを対象・客体として意識している主体」と「主体によって意識される特定のものごとの表象・概念という形態の対象・客体」が必ず存在し、意識している意識の内面では主体と客体とが常に対峙している。この時、主体は概念化・表象化されない形態で存在している。この主体は身体・知覚を介して現実の世界との交渉を保っている現実の自己・主体とは性格を異にしているが、この二つの主体が互いに交渉しながら、結局は現実の自己・主体のもとに統括される。つまり、民族や国家などの無意識的な意志が潜在している「意識する主体」と、在住する日本社会という「意識される客体」は常に対立する。しかし、表象化された主体は既に両者の統合の結果として表われている。

さて、自分と自分に付けられた名前が分裂を起こし、自己の存在証明が不確実であること、つまり「主体性」の確立に関わる問題は、現在多様な形で解釈・議論されている。例えばクリステヴァの「言表の現象学的主体」の一段落を引用してみよう。

主体性とはセミオティックにしてかつサンボリックなのだから、主体が産み出す意味体系はなんであれ、「もっぱら」セミオティックであることも、「もっぱら」サンボ

⁵ 同書、13頁。

リックであることも不可能であって、相手に負った負債のしるしを免れることはどうしてもできないのである⁶。

クリステヴァの言う「主体性」とは、言語活動の主体として措定されるものである。彼女の理論を援用すれば、「ナン」という言葉と「ミナミ」という言葉は、歴史、社会、イデオロギーといった外部と結びついた領域、つまりは〈ル・サンボリック〉に属する。したがって「私」の内的欲動の場、つまり〈ル・セミオティック〉によって、分裂され、統合され、再度分裂される。すなわち、「主体性」とは〈ル・サンボリック〉になると同時に〈ル・セミオティック〉の場にもなりうる。これは、不断の矛盾状態・分裂過程・生成過程にある「主体」の存在様態を表わす。

南という名字を持つ「私」は、「ミナミ」と呼ばれる特殊の状況にあったからこそ、「ナン」との分裂を正面から体験することができたと言える。自分がいくら「ナン」と呼ぶべきであると思いついていても、周りから「ミナミ」と呼ばれている限り、「ナン」という名字と自己との同一性は確認されない。また「ナン」と呼ぶべきであるという欲望に囚われている限り、「ミナミ」と呼ばれる世界で名前と自己との同一性が見い出されることはない。この瞬間の「私」の意識は、「ナン」でもなく、「ミナミ」でもない確定不可能の事態に向かい合うことになる⁷。

ここで、「ナン」や「ミナミ」という呼び方が自己の〈サンボリック〉な様態であるとすれば、その動的生成の場である〈ル・セミオティック〉とは、「私」が属している共同体およびその中での自己「意志」である。名前とは、人が生まれてから「あるもの」であり、その「あるもの」とは社会的な要求であり、周りの人々が実現してくれる「私」のものでありながらも、他者によって貫徹されるものである。この小説の場合、〈ル・セミオティック〉は、対立関係にある二つの共同体の衝突から動的に作用する。「ナン」という出来事には、朝鮮人という民族への同一性、朝鮮語という民族言語への同一性などの要因が働いている。また「ミナミ」という出来事には、日本人社会、日本語、あるいは植民地状況という要因が働いている。この両者は結局両立不可能である。その結果衝突を起こし、自己の分裂をもたらす。しかし、分裂段階を経過した後、再び生成段階に入り、〈ル・サンボリック〉としての現実社会に参入する。ここで言う〈サンボリック〉の様態としては、「ナン」という呼び方、「ミナミ」という呼び方、あるいは直面する他者による、それぞれの違う呼び方などが考えられるだろう。

「光の中に」は、自分に与えられた名前の呼び方によって、また自分の使用言語によって、主体の主体性が変わっていく事態を明確に提示している。このように、「名前」という出来事の外部と自己意志という内面の相互関係についての分析から、主体性の追求や挫折、抵抗の中で生きてきた植民地朝鮮人の時代像を把握することができた。

また、「光の中に」が発表された翌年である1939年、「創氏改名」という朝鮮住民の日本名への変更が社会問題化した。つまり、「光の中に」は、「南」という「私」を設定することによって、朝鮮人に日本式の氏に切り替えることを強制した「創氏改名」それ自体を

⁶ J. クリステヴァ『詩的言語の革命』第一部、原田邦夫訳、勁草書房、1991年、14頁。

⁷ 鄭百秀、前掲書を参照せよ。

風刺しているのである。そうであるならば、この「名前」という出来事が含んでいる問題とは、植民地住民全体が経験したはずの自己意志と行動の分裂を具体的に示すものではないだろうか。

2. 「光の中に」何を見るのか

この小説は、「私」の観察と、再構成という作業から成る二重のプロセスによって、「山田」という少年のイメージを生み出していく。つまり、「私」の視点の移動にともなって時間が進行し、物語が展開する。「私」は観察者という客観的な立場を持つ第三者である。このことは、テキストの解釈において重要である。それは、テキストの中の様々な構成や意味を発見したり投射したりすることができるからである。

物語の始めのところで「私」は少年を「不思議な子供」であると思う。最初は少年のことをあまり気にしなかった「私」が、彼との関わりによって経験することが物語全般の筋を成している。「私」が朝鮮人であることを知り、少年は次のような反応を見せる。

戸を開けて覗き込んでいた子供の中、突然大きな声で喚いたものがある。

「そうれ、先生は朝鮮人だぞう！」

山田春雄だった。

「私」との最初の出会ってから、少年は「私」の民族性について疑いを抱いていたはずである。さらに言えば、彼は「私」が朝鮮人であることを望んでいたかもしれない。

「そうれ、先生は朝鮮人だぞう！」という大きな声は、山田にとって一種の歓呼の声かもしれない。「そうれ」という言葉は、疑いに対する少年の自己確信でもある。朝鮮人に対する少年の態度は、言うまでもなく歪められた表現である。他人に見せられない自己の内的部分である「朝鮮人の母」という最も大事でありながら、排斥しなければならない根源的な自己性の矛盾、それが朝鮮人に対する盲目的な拒絶をもたらす。しかし少年は拒否しながら、無意識の中ではそれを追求する。少年が「私」の周りに付きまとっていることがその証拠と言えるだろう。

ここで提示したいことは、少年の愛情を「母なるもの」への愛情として解釈することである。ここでまたクリステヴァの理論装置を援用することにしよう。

〈フェノ＝テキスト〉としての「光の中に」は少年を主体性の確立において葛藤し、抵抗する混血児として捉えている。つまり、現象としての小説は不幸の中で苦しむ植民地時代の少年の物語を提示している。とすれば、生成としての〈ジェノ＝テキスト〉はどんなことを表わしているのだろうか。

まず、このテキストは「母なるもの」を根源として形成されている。ここには、朝鮮語＝母語＝母性という関係が成立している。この抑圧されている「母性」は、解放、自由、平等などの意味群として表わすことができる。反面、日本社会という現実世界は、「父権社会」つまり、権力、支配、占領、暴力などの意味群として解釈することができる。

つまり、少年は「母なるもの」と「父なるもの」の間で、常に分裂を抱え込んだ存在として苦しんできたわけである。実際、少年の父親も「完全な日本人」ではない（少年と同

じく朝鮮人の母親と日本人の父親を持つ)。したがって、少年が追求している主体性は、さらにずれてゆく。

少年は日本に生まれ、日本語を表現手段として言語を覚え、日本の教育を受けながら育てられた。しかし「山田」という「父なるもの」に潜在する朝鮮の「血」、すなわち「母なるもの」の抵抗によって、少年は主体性を失い、迷っている。

「朝鮮人も入れてくれるかい？」

「そりゃ誰だって入れてくれるさ、試験さえうかれば……」

「嘘云ってらい。僕の学校の先生はちゃんと云ったんだぞ、この朝鮮人しょうがねえ、小学校へ入れてくれたのも有難いと思えって」

「ほう、そんなことを云う先生もいるのかい。それで生徒は泣いたのかい」

「うん泣くもんか、泣きやしねえよ⁸」

ここには、少年の無意識の中にある「母なるもの」の働きが顔を覗かせている。さらに、この会話は植民地時代の「内鮮一体」という日本の政治的スローガンの本質を暴露するものでもある。

少年は無意識的な「母なるもの」に引きつけられながらも、「父なるもの」への服従から脱することができない。少年が常に見せる「女の子や小さな子供たちを邪魔し」、「誰かが転んだりすれば待ち構えたようにやんやと騒ぎ立てる行為」は、歪められた主体性の表現と言える。少年の内面をより明確にするために、ここで、少年の父親について簡単に述べてみよう。少年の内面を理解することは、彼の父親に対する理解から始まるからである。

テキストの中で少年の父親は「半兵衛」と呼ばれている。ただし、この人物は「私」の回想シーンに登場するだけで、現実的な場面では登場しない。しかし「半兵衛」は物語全般において、非常に重要な媒介者の役割を演じる存在である。一言で言えば、彼は悪党である。「私」の記憶、李の証言、少年の母親の入院、少年の話などの現実的な出来事から、卑屈な暴君である「半兵衛」の顔が浮かんでくる。

作者は少年の父親に希望の「光」を与えなかった。「半兵衛」という存在には救いはない。金史良は「半兵衛」に対して絶望しているのかもしれない。つまり、「半兵衛」に救いがないこと、そして救いを求めないことは、彼が決して救いを信じることができないことを意味しているだろう。さらに言えば、「半兵衛」にとって救いを求める行為はより一層、彼を不幸にするだけである。不幸、つまり自意識という精神からの不幸は、救いという方法では解決されないだろう。すなわち、「私であるから」という不幸を救うものはない。「私であるから」、つまり「完璧な日本人でないから」、「混血性を有しているから」という根本的な自己性から来る不幸は、この時代多くの「半兵衛」を生み出したのである。

ここで、少年は父親と似た様相を示しながらも、根本的なところでは対立している。それは、「光」という人間としての希望の有無である。金史良は、少年への希望を「光」に喩えている。小説の結末のところを引用してみよう。

⁸ 金史良、前掲書、22 頁。

「先生、僕は先生の名前を知っているよう」

「そうか」私はてれかくしに笑って見せた。「云ってごらん」

「南（なん）先生でしょう？」そう云ったかと思うと彼は私の手に自分の脇にかかえていた上服を投げ付けて、嬉々としながら石段をひとり駆け下りて行くのだった。

私もほっと救われたような軽い足取りで倒れそうになりながら、たたたと彼の後を追うて下りて行った⁹。

このような結末には作者の創作意図が深く関与している。つまり、作者、「私」、少年の共有する、被差別の状況を克服しようとする欲望が機能している。小説「光の中に」の「光」とは、「嬉々としながら石段をひとり駆け下りて行く」少年のことである。つまり、舞踊家になる夢を持つ少年である。

少年は舞踊家になりたいという。こうした夢を持つ少年は、「母なるもの」という根源を求めている「光」である。少年が抱えているのは、単なる夢ではなく、調和的主体性へと向かう希望でもある。ここで少年の夢が舞踊家であるということは、どんな意味を持っているのであろうか。先生でもなく、科学者でもなく、医者でもなく、舞踊家になりたがる少年。この「舞踊」という芸術に内包されている身体的な欲動の表現とはいかなるものなのであろうか。ここで、「舞踊」は生産性を持つ自己実践的な出来事として捉えられている。朝鮮人である母親を隠すという「母なるもの」への盲目的な拒否感を持つ少年が、舞踊家になる夢を持っている。つまり、少年の内面には無意識の中から発する外部への表現欲求が作用している。これは、根源的なものさえ隠さなければならない状況に対する少年の反抗でもある。したがって、このような内的反抗は「舞踊」に対する少年の憧れ、夢として発露されている。身体によって内面世界を表現しようとする欲望、それが少年の追求している「光」なのである。「舞踊」は少年にとって、単なる夢にとどまるものではない。「舞踊」という外部世界へ向かう主体として、少年は自己の主体性の確立可能性を手にしたのである。

テキストは最後のところで、作者の確信を強調している。このテキストの強度は、何よりもこの「光」に込められた確信の強さにある。「光の中に」は、少年と「私」が朝鮮民族としての同一性を確認しながら、また日本語という統語の象徴でもある表現手段を用いながら、外部への超越を模索することを描いた物語である。この「光」とは、朝鮮民族の主体性の確立ではない。したがって、日本国民としての主体性の確立でもない。ここで「光」というのは、「一人の世界」に閉じ込められていた混血少年の外部に対する超越意識である。自己否定、自己非難を反復しながら歪められた主体性を示した少年が、「私」との出会いによって現実に向かう肯定的な思考を持つ。とすれば、ある意味で「私」という存在は少年にとって「光」をもたらす働きを果している。「私」という他者との関わりによって、少年は自分自身の束縛から解放され、自己の思考のまま行動する可能性を持つようになる。

⁹ 同書、56頁。

3. 植民地時代の「主体性」追求と挫折

ここでは、「光の中に」というテキスト中の人物の主体性を文学的に解釈してみることにしよう。つまり、少年はテキストの中の人物である。無論、彼の主体性の確立もこのテキストの範囲内で行なわれたものである。とすれば、このテキストの創作背景になっている1930年代の朝鮮人たちの「主体性」とは何であろうか。植民地時代の朝鮮人たちの主体性の追求や挫折、そしてそこにおける抵抗などは、「光の中に」の〈ジェノ＝テキスト〉分析にとって重要な意味を有していると思われる。

このテキストでは、被害と加害、協力と抵抗、あるいは親日と反日など、多様な社会現象が捉えられている。「思考する主体」と「行動する主体」の関係から捉えられる「主体性」は、こうした複雑性の中で様々な現象として表われてくる。

まず、革命者¹⁰たちの「主体性」は、「思考する主体」と「行動する主体」が隣接し、ほぼ一致する様相を表わす。彼らは、民族の解放や国家の独立という革命意志を持ち、この思想に従って対抗という行動を見せている。支配者側への抵抗意志から出発し、戦争という対抗手段によって戦う（行動する）。社会的現象から見れば、革命者たちの「主体性」は明確に成立するものである。確かに、出来事としての革命者たちの「主体性」は否定できないものである。ただ、ここで成立する「主体性」とは、革命者という前提から考えなければならない。つまり、革命を行なう多くの人々の持つ共同性としての「主体性」なのである。換言するなら、それは「革命者」と呼ばれている人々の全体的な思考と捉えられなければならないのである。

とすれば、「思考する主体」としての革命者たちの「思考」とは常に統一的なものではない。しかし、「思考」の統一性というのは幻想に過ぎない。目標が一致することと個々の「思考」が一致することは、まったく別問題である。同じく、思考の方法が一致するとしても、行動に差異が生じる可能性も排除できない。すなわち、一つの国、一つの民族という枠の中で捉えられる革命者たちの「主体性」は、一つの出来事として認識するしかない。さらに言えば、革命者たちは、植民地化された祖国の解放や民族の主体性を取り戻すために戦う。つまり、彼らにとって一致するのは「主体性」の確立ではなく、むしろ「主体性」の追求である。被支配民族の喪失してしまった主体性を再構築しようとする意識が革命意志の中に潜んでいるのだ。

ここで注意すべきことは、「意志」を考える時、それを古典哲学的な意志概念によって理解してはならないということである。例えばそれは、「意志としての意志」といった純粹意志のようなものではないし、行為から切り離されたデカルトの「自由意志」や「無差別の意志」とも異なる。ここでの意志とは「行為および行為の内容と一体」なのである。ミシェル・アンリは「意志」について次のように述べている。

意志は自分自身から決して離れることのない唯一の力である〔……〕意志は、実在から切り離されたり、また実在に先行し、それを呼び起こしたり否定したりするどこ

¹⁰ 「革命者」：ここでいう革命者は、日本の侵略に対抗し、解放戦争に参加した朝鮮人たちを指す。

るか、実在と同一であり、実在に内在し、真に実在の本質を構成するのである¹¹。

アンリによれば、「意志」とは自分自身を意欲する自己運動である。さらに言えば、「意志」は人間の本質である。「意志」はある種の顕現の条件に従う限りで実在なのである。それは実在を構成し、実在と同一であるような意志独自の開示様態である。つまり、意志を実在たらしめるのは、この意志の開示様態なのである。

とすれば、「意志」は〈セミオティック〉な場である。欲動の持つ生産性が人間の本質であると規定すれば、この「意志」とは眼に見えないその欲動の根源であるだろう。つまり、「意志」はあらゆる「行動」であり、「行動」の中に内在し、「行動」の本質を構成し、また「行動」を生成するものである。このような「意志」の働きは、他者との関係の中で形成される自己と矛盾しない。「意志」の欲動は常に他者との関係の中で発するものであるからだ。

革命者たちの抵抗「意志」も、他者からくる抑圧（侵略）の中から生じたものである。したがって、彼らは解放戦争という「行動」で、自分たちの「意志」を表現する。上で述べたように、この場合、「意志」と「行動」は一致し、革命者という全体的な「主体性」を確立することができる。

「光の中に」というテキストに戻ることにしよう。少年が最初追求していた「主体性」とは、血の同一性の追求であった。少年が「混血」であることを否定し、父系の血である日本人（厳密に言うならば「混血」日本人）のほうに、あるいは母系の血である朝鮮人のほうに、交互に自分の血統的同一性を求める過程を、「光の中に」は注意深く追っていく。「僕は朝鮮人でないよ、僕は、朝鮮人でないんだようー、なあ先生¹²」、少年のひどく苦しそうなこの悲鳴は、朝鮮人の血と日本人の血が自分の中に同時に存在することに対しての徹底的な否定である。すなわち、結局のところ、自分の中にある日本人との差異性の否定、同質性の追求に他ならない。しかし、この「父なるもの」への同一性を求める心理傾向は、少年の本来的な欲望に起因するものではない。それは、現実的状况によって生じていたものである。つまり、少年の追求してきた最初の「主体性」とは、彼の意志に起因したものではなく、他者との関係の中から生じたものである。「混血」という条件に対する社会からの人種的差別から来る「父なるもの」への執着である。

テキストの結末のところで、少年は自分の「混血」に対する束縛から脱しようとする欲望を表明する。つまり、他者との関係性から生じる様々な葛藤や矛盾から解放され、「舞踊」という芸術を通して「主体性」を確立しようとするのだ。

言語や血統に関する集団的イデオロギーが時代の支配的価値として個々人を抑圧する状況の中、それに対する個人の実存的抵抗を描き出したという点で、「光の中に」は植民地朝鮮人作家による日本語文学の中で例外的な意義を持つ作品であると言えるだろう。そして、まさにこの点にこそ、小説による脱植民地主義的实践への可能性が見い出されるのである¹³。

¹¹ ミシェル・アンリ「ジェネロジテと現象学」『現代思想第十八巻第五・六号』、大西雅一郎訳、青土社、1990年、58-59頁。

¹² 金史良、前掲書、24頁。

¹³ 鄭百秀、前掲書を参照せよ。

おわりに

本論は「主体性」という用語を用いてテキスト分析を行なおうと試みるものであった。ここで取り上げている「主体性」とは、哲学用語である「主体性」とは違う意味で用いられている。論のおわりに至っても「主体性とは何か」というはじめの問題提起に答えることは難しい。さらに言うなら、最初からこうした問いへの答えは存在しないのかもしれない。

また、本論は「光の中に」というテキストをめぐって、「主体性」の追求と挫折を分析しようと試みた。具体的には「私」の名前の呼び方や少年の夢などを、自己の「意志」や「行動」というキーワードを交えて分析しようとした。ここで、もう一度確認しておきたいことは、「意志」とは分裂・生成過程にある自己内面の欲動の場であり、「行動」とはその過程から生み出された社会的現象であるということだ。本論には、クリステヴァの理論を誤用している面があるかもしれないが、異質な対象についての議論を展開する契機となり得たという意味ではそれなりの意味を有するものであると考える。

（ぱく・ぎんひ 本研究科博士後期課程）

参考文献

- 磯貝治良『在日文学論』、新幹社、2004年
岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳『継続する植民地主義』、青弓社、2005年
金史良『光の中に』、講談社、1999年
鄭百秀『コロニアリズムの超克』、草風館、2007年
西川直子『クリステヴァ』講談社、1999年
庭田茂吉『現象学と見えないもの』晃洋書房、2001年
和田敦彦『読むということ』ひつじ書房、1997年
J・クリステヴァ『記号の解体学—セメイオチケ1』原田邦夫訳、せりか書房、1983年
J・クリステヴァ『詩的言語の革命』第一部、原田邦夫訳、勁草書房、1991年